

桐に恋して18年

「桐のママ知識」

二〇〇八年三月十日、福島県三島町で開催された日本初の桐のシンポジウムに参加させて頂いた際、飯塚三男先生（現NPO法人桐、ささやかな植樹祭理事）の講演を拝聴し、国内での桐の危機的な状況を知りました。

桐の苗を年間に百本以上生産している生産者は、国内にわずか二軒しか残っておらず、桐のメツカ会津でも桐の栽培が十分の一まで減少していたのです。桐の木は今から六千万年前に誕生したまだ若い樹種で、未だ地球気候の変動に順応し進化変質しながら30種類まで増えてきました。純正な会津桐は、従来の紫色の花が咲く種と言われてきましたが、実は白い花が咲くミユキギリであるという新たな実地検証結果が発表されました。日本で馴染みのあるアオギリ、ファルカタは桐には属しません。桐は、箆筒、下駄、琴、能面、箱、まな板など、国内での用途は数百種に及びます。

世界六〇か国以上に生息する桐ですが、なぜ日本だけがこれほど桐を「木質素材」として活用できたのか、それは日本に卓越した刃物製造技術があったからです。温度、湿度の微妙な変化で動きをみせる繊細な桐、海外の刃物では切っても切ってもぼそぼそになってしまいます。その桐に納まりをつけピタリと空気を密閉遮断して作り上げる桐職人の技と、刃物作りの鍛冶、砥の職人が作る刃物があったからこそ、日本が唯一桐の産業と文化を育んでこられたのです。

桐の輸入大国日本が、中国から原木として桐の本格輸入を開始したのは統計上明治三五年まで遡ります。昭和四〇年代後半には、中国が桐原木輸出を禁止したため、桐板材と桐完成品の輸入に切り替わり、桐業界に一つの大きな問題が発生しま

した。アク抜きのされていない桐製品の輸入が拡大していったのです。昭和五〇年代からカラーテレビと通販が普及し高級に見えて格安感のある製品が庶民購買製品の主役に躍り上がりました。テレビ映りを良くしようと桐製品の木肌を真っ白に漂白し、コスト削減として映像には映らない調湿、断熱、防虫防臭効果を生み出すアク抜き工程を省き、見栄え優先の桐製品が主流になってしまいました。これが桐の品質に対する信頼低下の始まりだったように思います。

既にこの頃、日本で消費される桐の92%は中国台湾、アメリカ、中南米からの輸入材で占められ、この輸入比率は、原油にも匹敵するほどの海外依存度でした。農林水産省の統計では、ここ五年間で国内生産が半減し、2010年にはわずか800立方米まで減少してしまいました。日本はこのままでいいのでしょうか。

株式会社グリーンフラッシュ  
代表取締役 八木隆一